

NHK スペシャル あの日から 25 年 大震災の子供たち 2020 年 1 月 17 日放送

震災から 25 年で初めての調査

当時小中学生だった 5 9 1 人から回答

震災に対する心境の変化

6 割が震災をポジティブ・前向きに捉えている。
家族を失うなど被災程度が高い人においても 6 割
震災の体験は、非常に辛く悲しい体験。マイナスの意味を持つものが多いが、それが 25 年間に何かのきっかけ、原因でプラスの方に、肯定的にその体験を自分の人生の中で捉えている。
それは非常に驚き。

なぜ？

生きることには意味がある、人間捨てたものではない、震災を経験に成長できた、全ての項目にプラスの回答をした、

長谷川元気さん 33 歳 当時小学 2 年生

1 歳（翔人）の弟と 34 歳のお母さんを亡くした。

幼い身に震災はあまりに辛い体験だった。

責任感が強く、しつけには厳しかった母、褒めてくれるときの優しい表情が元気さんは大好きだった。でも、震災が全てを変えた。全壊した自宅から、父、1 つ下の弟、自分は脱出できた。

でも、母と、弟は、埋まったままでした。

「きっと、お母さんと翔人は生きてる」と、そう自分に言い聞かせながら待ってましたね。

父が目に涙を浮かべながら「あかんかったわ」と言ったとき、すぐに状況はわかりました。

だから、もうその瞬間に泣き崩れるような感じでした。

当時の元気さんは、張り裂けそうな気持ちを自分の小さな胸に抱え込んでいました。

茄子は元気が好きやから・・・（お父さんが調理している）

小さい頃は、茄子が好きということも知らなかった。

父は、仕事をしながら全ての家事をこなし、子供達を育ててきました。

父はやっぱり僕たち、弟と僕のことを考えたので、色々してくれているのはわかっていたので、（悲しむところを）見せたらやっぱり心配するじゃないですか。「ああ、やっぱり悲しいんやとか・・・」それを見た人が「やっぱり困る」というか・・・どうしようもないじゃないですか・・・。

それを思って（お父さんにも）あんまり見せることはなかったと思いますね。

元気さんが悲しみを表に出さないようにしているのをお父さんもよく覚えている。

「お互いに薄々“こうやろうなって”思っても、積極的にそういうのは具体的に口にしない、というか・・・。自然と口にしないような雰囲気になってたからね。」

震災時の作文

「おとうさん、大丈夫？」と呼ぶと「元気、大丈夫か？」と言り返したから「僕は、大丈夫やけど、壁に囲まれてんねん」

自分が助かるまでの状況が綴られている。唐突な一言で終わっている。

それから2日目、たつのに行って火葬しました。(母と弟に何があったのか、これ以上書かれていませんでした)

人前では悲しみを出さずにいた元気さん。辛い気持ちが抑えきれなくなると、校庭の片隅で隠れて泣いていました。

そんな元気さんをそっと見守っていた人がいます。担任の酒井久栄先生です。

突然、母と弟を失いながら、悲しみに耐えている、わずか8歳の教え子。一人で泣いている元気さんを見つけると、そっと近づきました。

「酒井先生が、僕の隣に座って・・・来てくれると余計に泣いてしまって・・・僕がずっと泣いているのを泣き止むまで背中をさすりながら隣に座っていてくれた。

酒井先生「本当に辛いものがあったと思います。それをこみ上げてくる気持ちも元気くんはぐっと抑えて・・・彼のそういった気持ちを見守ってあげたい、支えてあげたいというのが一番の気持ちです。」

震災以降、人知れず抱え続けていた思いを、ようやく打ち明けることができたのは、中学1年生の時でした。相手はテレビ局のディレクターでした。

大阪の民間放送局に勤める女性が家族の密着取材をしていました。

ディレクター：お母さんがいないって思ったことある？

元気さん：(夢の中で) 普通になんか地震前みたいに家にいて「ああ地震なんかなかったんかな？」みたいな、(母と弟の) 夢を見たときは、かなり涙ぼろぼろ流している時とかあんねんけど、・・・自分も誰かに伝えたかったという、溜め込んでしたわけじゃないけれど、ずっと心の中にしまっていたことを何か伝えたいという気持ちもあったのかなって、今になって思いますね。

ディレクター：知り合いじゃないから言えたと思う。例えばお父さんに言ったらお父さんがまた悲しむじゃないですか。なんとなく知らない人の方が言いやすかったのはあるかもしれない。

少しずつ表に気持ちを出すようになった元気さん。酒井先生は、元気さんの成長をそっと見守り続けていました。折に触れ、元気さんを気遣う手紙を届けていました。

「あれから19年、とても速く感じます。でも、いろいろな思いが溢れて・・・」(19年後の先生の手紙)

家族も傷ついた中、周囲の大人たちの存在が、自分を支えてくれたと元気さんは感じています。

人との出会いの大切さであったりとか、そういうことを震災が教えてくれたなと思って、自分の人生に活かしていないといけないなって……。それが僕が震災と向き合ったことで見えてきたことかなって思ってるんですけど。

大人になり、元気さんが就いた職業は小学校の先生。あの時の酒井先生と同じように、子供達と向き合う日々を送っています。

辛い気持ちを打ち明けきれなかったあの時、今では少しでも知ってもらいたいと思うようになりました。

子供達への授業：先生は震災でお母さんと当時一歳半だった弟を亡くしました。先生は当時小学校2年生でした。その時に、とても後悔しました。どんな後悔をしたかというと、もっとお母さんの喜ぶ顔が見たかった。もっと弟の喜ぶ顔が見たかったと思いました。みんなは今、自分の周りの人、家族や友人や親戚の方でもいいです。今、自分の周りにいる人のために何ができるかな？」考えてノートに書いてください。

「震災があるから今の自分がある」元気さんは、各地で自分の体験を語るようになっています。

アンケートで被災体験が辛いほど、家族には打ち明けていないことがわかりました。

被災度 低：42% 中：51% 高：33%

支えたのは先生、近所の大人

一方で、震災の体験を前向きに捉えていない人が4割

長谷川元気さんは石巻を訪ね、遺族と交流を重ねてきました。

佐藤俊郎さんのお宅を訪問。大川小学校に通う次女のみずほさん（12歳）を亡くされている。

当時中学2年生だった長女のそのみさん（23歳）

元気さんが、亡くなった母や弟の夢を見たことを語った時でした。

そのみさん：「妹と一緒に遊んでたりとか、夢の中で遊んでいても、必ず最後は“じゃあね”って消えていってしまうんですね。小さくなってしまったりとか…どっかに行ってしまったったりとか…そういう夢を見るのが高校生の時は多かった。」

そのみさんは元気さんに最後にこう尋ねました。「聞きたいことがありました。“今 幸せですか”って質問です」

元気さん「はい。幸せです」

そのみさん「自信を持って幸せですか？」

元気さん「やっぱり、すごい周りの人に恵まれたなって・・・今が一番幸せやなって思います（何度もうなずきながら）」

親になって震災の受け止め方が変わった方

35 歳女性（当時小学 4 年生）

子供が生まれ、当時の年齢と近くなるにつれ、怖い思いをさせないために、親が色々と気を配っていたのだろうな、と感謝の気持ちが多くなります。

40 歳女性（当時中学 3 年生）

やはり 15 歳の頃と、40 歳の二児の母の今とでは受け止め方が全然違います。他人事ではなく、いつ誰でも「被災者」になりうることを子らと話し、自分のことをまず守るように話しています。